横浜市小児科医会ニュース

No. 25　2002年10月１日

故　三澤孔明先生を偲んで

横浜市小児科医会　顧問　五十嵐　鐵馬

彼との出会いは昭和17年３月，隣組６小学校の６年生級代表者各１名から成る28名の伊勢参宮詣の旅行の時でした。大東亜戦争の勃発により修学旅行が中止となり，替りに代表者のみが戦勝祈願の名目で京都，奈良，伊勢と巡り楽しい思い出となりました。今も残っている記念写真に彼の童顔があります。そして翌４月には県立横浜一中の一年五組で一緒になりました。二年以降は級も異り，勤労動員先も別，そして敗戦後の混乱で絶えて久しい月日が経ちました。彼は市大卒業後，アメリカのベイラー医大で学び，市大小児科教室へ，私は昭和33年警友病院小児科に赴任し，再び小児科医としての交友が始まりました。彼は心臓を専攻し，開業後も早くから学校心臓病判定委員として活躍し，昭和60年より発足した学校心臓病検診検討委員会の委員長として，多年に亘り指導的役割を果し，現在の市心臓病検診システムの構築に多大の貢献をされた事は衆知のことで，文部大臣表彰，横浜市医学功労者表彰等を受章されています。当市小児科医会は私が従来の小児科連絡懇話会会長を引き受けた後，発展的解消を行い，平成元年に小児科医会として新発足したもので，会の運営が軌道に乗った平成９年に私が引退し，世代交替の繋ぎ役として彼を後任に推薦した次第です。爾来２期４年間，会長として活躍し，昨春，矢崎部会長に引継いた後も，私と共に学校医部会副部会長として学校医部会の改革に勤めておりました。彼は温和で真面目な典型的小児科医であり敬虔なクリスチャンでした。酒は飲まなかったので付合いはありませんでしたが，私と同じ下手の横好きのゴルフでは聊か付合いがありました。体躯を利しての豪快なティーショットが眼に浮びます。本年春の南区医師会のゴルフコンペで優勝されたと仄聞しましたが，もって冥すべしでしょう。碁もなかなかの打ち手でしたが，私を苦手とし，三子で負けて以来，絶えて打ちませんでした。本年２月，中学期会のゴルフと碁の会の事で電話連絡した時は全く元気でしたが，４月の総会の折に入院中と聞き，そのうち御見舞をと思っているうち５月23日逝去されました。膵臓癌は経過が早いとはきいていましたが，あまりの早さに驚きました。享年72歳は昨今ではやや短い生涯かもしれませんが，為すべき事をなした生涯といえましょう。天国での安らかな眠りを祈ります。

故　三澤孔明前会長の想い出

会長　矢　崎　茂　義

三澤先生が横浜市大センター病院に入院されたとの連絡が相見先生より入り早速お見舞にはせ参じたのは4月末の木曜日であった。一寸顔色がお悪い感じとお見受けしたが，比較的お元気で，病室内を歩行されていた。3月の医学研修の日に市医会より今年度の学術功労者として表彰を受ける予定であったが，不意に欠席されたので，気にかけていたところだった。お見舞の折にこのことをお尋ねしたら「その日に大腸検査を受けていたんだよ」と告白された。つづけて腹部エコー検査の結果，「すいがん」が発見されたのだと病状のこともつけ加えて話してくださった。「今は精密検査なので，退院したらのんびり子供の診察をするよ」と云われた。枕頭台には月末のカルテがあり，病名をつけていられる御様子をみて，「がん」と宣告されている身で，今更ながら医師としての責任感がなんと強い先生なんだと驚かされる。

「がん」の進行は予想以上に早く，一度も退院される間もなく，他界された。

市小児医会の発展に会長として尽力されたが，学校医活動は40年の永きにわたり，立派な功績を残された。市の心臓病検診事業の発足当初から携わって，子供達の心疾患の早期発見，管理，指導に情熱を傾注された先生を横浜市の小児科医としては，永遠に忘れてはならないのではなかろうか。

先生からはもっと色々お教えていただきたいことがあったのに残念です。御子息のお別れのことばにありましたが，「人生を太く短かく生きられた」と本当に思いました。どうか我々の会の発展と子供達の幸せをあの世から見守って下さい。　合掌

二つの提言
(23)
小児疾患と運動
スポーツと心疾患

しばた医院
柴　田　利　満

スポーツ中の心臓性突然死が新聞などで報道されることがありますが，この予防には心疾患の診断と適切な管理が必要であります。人間の日常生活は，心臓への負荷という面から見ますと，エネルギー消費が一番少ない安静睡眠時と一番エネルギー消費が多い最大運動の間を揺れ動いています。運動は，程度の差はありますが，心臓により多い仕事量を要求することですし，心臓への命令系として交感神経が興奮している状態です。より多い仕事量は，病気の心臓の能力を上回りうっ血性心不全に導きますし，交感神経の過剰刺激は不整脈を生じ易くします。心疾患児，重症不整脈児は，その患者に許容された範囲での運動量を守っていれば，心事故も減りますし症状の悪化も防ぐことができると思います。

心疾患は基質性心疾患と不整脈に二大別されます。器質的心疾患には，先天性と後天性がありますが，突然死を起こすことがある先天性心疾患としては，先天性心疾患術後，チアノーゼ性心疾患末期，アイゼンメンゲル症候群，大動脈弁狭窄症，重症症例などが挙げられます。これら疾患は専門病院で診断管理されていますので学校生活での管理などでは情報入手が大切です。術後例も，手術による治癒度は異なります。家族は手術をしたのだから100%治ったと誤解している場合もよくあります。手術の進歩により今後ふつうの学校生活を送る術後症例も多くなります。その治癒程度に応じた生活管理が大切です。心臓病と聞いて極端に過保護に走るのではなく，その子の状態に合った適切な管理が重要です。中等度以上の大動脈弁狭窄症では運動中の突然死の可能性があります。小児期のこの疾患はうっ血性心不全など呈さないことが多く，外観は異常ありませんので不用意に強い運動を課すると運動中の失神，突然死につながります。

突然死を起こす可能性のある後天性心疾患は，肥大型心筋症，原発性肺高血圧症，冠動脈病変を持つ川崎病などです。小児，若年者の肥大型心筋症は，運動中に突然死を起こすことで有名です。安静時は無症状ですので，不注意に強い運動をさせますと運動中の突然死につながります。肥大型心筋症は中学・高校の学校心電図検診で初発見されることが多い疾患です。

突然死をおこしうる不整脈疾患は，完全（高度）房室ブロック，洞不全症候群，心室頻拍，QT延長症候群など重症の不整脈です。運動誘発性心室頻拍は，安静時は心室期外収縮の散発程度でも，運動負荷がかかると心室期外収縮から心室頻拍に移行し，高率に失神，突然死を起こします。この診断には，安静時の心電図のみにとどめず，運動負荷試験を行って頻拍出現の有無を調べることが重要です。KVLQT1遺伝子異常を持つ1型QT延長症候群は，運動中および水泳中の失神・突然死が多いことで知られています。

以上，重症例について述べましたが，軽症例では何の運動制限も必要ありません。心臓病管理指導表も今年より学校生活管理指導表に改まり，患児のスポーツなど学校生活の管理がよりきめ細かくできるようになりました。主な変更点は，治療程度を示す指標がなくなり，運動レベルのみの判断になったことと，運動可・不可の判断がスポーツ名ではなく運動強度になったことです。例えば，今まではサッカー禁止とのみ表記されましたが，新しい記載ではサッカーのパス練習は可だが，試

合形式のサッカーは不可といった表現です。学校側，両親・患児，医療機関の３者が誤解の無いように連絡をとりあって過不足ない生活管理ができることが大切と思われます。

「喘息児とスポーツ」

横浜南共済病院小児科部長
池　部　敏　市

私が気管支喘息の診療に専門に携わるようになって20年が経過しました。医師の経験を積み重ねてゆくと，どなたでも印象強く心に刻まれた患児の記憶を幾つかはお持ちだと思います。私にとってこのような記憶として鮮やかに残っているU君に初めて出会った時，彼は中学１年生でした。今から十数年前の秋の盛りに，私の勤務してた横浜市小児アレルギーセンターに，紹介状を携えて母と共に来院されました。診察室へ入ってきた時，母は少しやつれた顔に不安げなまなざしで，U君は小柄でいがぐり頭をしてドングリまなこの顔が，終始うつむいたままでした。

気管支喘息のU君はスポーツが大好きでした。なかでも野球が得意で，小学生の頃から仲間と一緒によく野球に興じていたそうです。中学に上がると早速野球部に入部し，毎日放課後遅くまで激しい練習をする生活が始まりました。ところが間もなく，運動中に咳嗽や軽い呼吸困難が起こるようになり，部活の練習に支障が生じるようになりました。喘息が少し悪くなったと感じたU君は，かかりつけの医院を受診して治療を開始しましたが，真面目で努力家の彼は練習を休むことはありませんでした。喘息の病状は日に日に悪化をたどり，二学期になると夜間の喘息発作の為に眠れない日もしばしばあり，遅刻や欠席など学校生活にも影響が出てきたため専門病院に紹介されたのでした。U君は自分の努力が報われず野球をすることも困難となり，運命に打ちひしがれたごとく無気力状態で受診したのでした。すぐにU君の長期入院治療が開始されました。病状管理を十分に行いながら無発作の状態に持ち込む入院治療が功を奏し，U君は見る見る元気を取り戻しました。やがてアレルギーセンターのグランドでは野球をする児たちの姿をよく見かけるようになり，その中心には活発に動き回るU君がいつもいました。

多くの喘息児で運動をすることにより喘息発作が生じることが知られていて，この現象を運動誘発喘息といいます。気道よりも冷たく乾燥した空気で過剰に換気されたことによる気道上皮の浸透圧の上昇が，気管支攣縮を起こすと考えられています。従って冬季に野外で行われる持久走やサッカーでは起こりやすく，逆に加湿加温の効いている水泳では非常に起こりにくいようです。運動誘発喘息は通常，激しい運動中，もしくは終了数分後に起こり，運動終了後５～10分後にピークとなり，通常さらに20～30分で消失します。一部の喘息児では，運動が唯一の喘息症状の原因となっていることもありますが，もちろん運動を禁止することが解決策ではありません。U君の例で示したように，患者が希望するどんな運動でも喘息症状を呈さずに行えるように治療を行い，運動誘発喘息によって激しい運動への参加もしくは遂行が妨げられてはならないのです。また運動誘発喘息は喘息のコントロールが良くなれば軽減し，発作が生じやすくなれば増悪するので長期管理薬の過不足の判断にも応用できます。対応策としては，まず運動誘発喘息を起こしにくいスポーツの種類を選択し，入念なウォーミングアップを行い，数日ごとに徐々に運動強度や量を増やし身体を慣らすトレーニングを行います。同時に喘息をコントロールする薬物療法を十分に行い，さらに運動前にβ_2刺激薬（and or）クロモグリク酸（インタール®）を吸入する

ことにより，80%以上の患者で運動誘発喘息を予防できると言われています。もし運動誘発喘息が起こり始めた時は，無理をせずに早めに運動を一時中止し休憩をとることで多くは回復しますが，β_2刺激薬の吸入などの治療が必要なこともあります。十分な予防治療を行いながら運動を続けることで，心肺機能の向上と共に運動誘発喘息そのものの改善が図られますので，喘息児のQOLを飛躍的に良くすることが可能です。これから冬に向かい運動誘発喘息のシーズンです。冬に心おきなくスポーツができれば，喘息治療も完璧といえるでしょう。さて，U君は今もスポーツを続けているのでしょうか……。

医会通信

○市小児科医会の再構築

この１年間で地区小児科医会がより一層結束し，意見を上部に届きやすくする目的で会則の改正，幹事の機能分担など見直してまいりました。その結果14年３月迄に各地区小児医会として名称を統一しました。定款改訂委員会をつくり，野崎副会長の御尽力により討議を重ねた結果，会則の中で会長選挙規程や会員資格等の条項を７年振りに改訂し５月の総会にて承認されました。会員の増強をはかりべく市小児科医会の存在をPRしていただきたい。事務局に会則や入会手続の書類がありますのでよろしくお願い致します。75歳以上の会員には補則のとおり会費免除を徹底致しました。

次年度の総会までに会員名簿を発行する予定で準備中です。

○横浜市小児科医会新点数改正説明会（４月22日）

小児科医会の主催では初めての試みでありますが，専門分野に絞った上記説明会を開催致しました。今回の改正の要点（有本泰造・国保小児科審査員），質問回答（大川一義・元社保小児科審査員），再診請求事例検討（寺道由晃・社保小児科専任審査員）につき解説をいただき，出席者約30名あり好評でした。

○緊急レセプト調査（小児科関係のみ）

市医師会より今回の点数改正に係る影響度調査の依頼が本会宛にありました。３月分（改正前）と４月からの新点数を同一レセプトで入れかえて比較して報告しました。緊急に調査をしなければならないため，常任幹事の先生方のレセプトより抽出させていただきました。「院外処方で検査あり」の場合３～６％減，「院外で検査なしだが，ネブライザーをする」６％減となりました。「院内処方で検査なしの場合」２～１％減でした。

○意見書の提出（４月）

「休日急患診療所・夜間急患センターにおける小児への解熱・鎮痛剤の使用について」今だに上記診療所において，特定の病気へ禁忌とされる小児用解熱・鎮痛剤が使用されている現状に，市小児医会として注意を喚起させる目的で意見書を提出しました。

○サマースクール（７月）

今年は中野常任幹事が委員長となり，本事業の出動医の公募を行いました。２名の参加応募者と去年と同じ聖マリ東横病院より３名の小児科医の応援をえて，３泊４日の合宿行事を無事終了出来ました。新品のネブライザー器械も３台購入され，定時吸入も支障なく行われました。一般会員の小児科医会の先生方の意見も採用して，運営面で少しづつ改善されてきていると思います。

（会長　矢崎　茂義）

研修会抄録

日常診療に必要な小児眼科の知識

川崎市　森 実 秀 子

1．日常頻度の多い小児眼疾患について

鼻涙道通過障害，睫毛内反症，流行性角結膜炎，眼瞼下垂，先天白内障，内斜視，外斜視，眼性斜頸，偽斜視，各種弱視，横目づかい症候，など最近の考え方と治療，対応を紹介し，眼科へ紹介する適期などを述べた。

2．乳幼児の視力評価の意味，視力評価の実際

3歳児健診が法制化され，3歳児の視力検査が全国的に施行されるようになった。小児の視覚発達過程における，弱視や失明予防のための貴重な取り組みである。一般に3歳児の答えは精確さに欠けると思われがちであるが，実際には再現性のある値が得られる。そして他覚的に屈折度数や疾患に連動した的確な値が表出される事が多い。自覚的視力を測る意味は，精神発達や目の屈折異常，全身または眼固有の疾患などによって修飾された視覚発達を量定することにある。両眼の生活視力や，視的学習が一定のレベルに達していればそれで良いというのではなく，眼科的には左右眼の視力発達の差を問題とする。差にこだわる。両眼視機能の発達や弱視の発生がそこに深く関わるからである。3歳児健診は子が誕生してから3年間の知的発達や視的発達をまとめて探っている訳であるから，人生初の視力評価という意味でとても大切である。許されるならもっと早期から健診を必要とすると考える。最近では生後2ヶ月頃から乳児の視力評価は可能である。大げさな装置がなくとも日常臨床の場で，簡単に出来る。だから3歳児に限らず，低視力が疑われる時は生後すぐからでも眼科へ送って頂きたい。この場を借りて乳幼児に用いられる視力評価の方法，あの手この手（発達行動の観察，Teller card method，Cardiff card method，dot card method，絵指標法，ラ環視力法など），とその値の意味するもの，応用などvideoを用いて紹介した。

乳幼児期は弱視や斜視が最も形成され易い感受性期である。先天要因プラス生活習慣（寝遊び，頬ずり見など）で斜視や弱視は悪化し固まっていく。予防するならこの時期である。

少子化した昨今だから，可能な限り，細やかな視覚管理を果たしてみたいと考える。また高齢化社会であればなお，老いても視的生活を豊かに保つべく視覚形成の母体である幼児型視覚を両眼共に（スペアアイの意味も含め）健やかに守っていきたいと願う。

第12回横浜市産科小児科研究会講演

胎児の外科的治療

国立成育医療センター特殊診療部
千　葉　敏　雄

新生児外科疾患の多くは出生の前後で共有されている。小児外科の立場から注目されることは，同名疾患でありながら出生前では，時に経過・予後が大きく出生後と異なり，分娩まで治療を待つことが病態の増悪をきたし，母児の周産期予後あるいは出生後長期のQOLを損なうということである。この事実は，治療開始の時期を胎児期に遡ることが，これまでの出生後治療の限界を越える手段たりうることを示唆する。かかる胎児外科治療が現実の問題となってきたのは，わずか20年程前のことである。これは多くの新生児外科疾患において，出生前のNatural historyが検討され，それまで認識されていなかった周産期死亡（Hidden mortality）の存在することが，はじめて明らかにされてきたことによる。一方，多くの動物実験や臨床経験から，新生児外科疾患のうちでも，治療成績面や医療経済からみて，出生前に何らかの治療を要する病態が識別されてきた。具体的には，先天性尿路閉塞症，先天性横隔膜ヘルニア，先天性嚢胞性腺腫様奇形，仙尾部奇形腫などが挙げられるが，近年は更に，双胎間輸血症候群，脊髄髄膜瘤までもがその対象となっている。現時点で胎児外科治療は，術後の未熟児分娩など，いまだ解決されるべき問題は多い。しかし技術的問題の多くは対処可能となりつつあり，同時に，子宮内外科治療が，母体の安全性や次回妊娠の可能性を損なうものではないことも明らかとされている。しかしその一方，胎児外科治療はいまだ確定されたものという訳ではない。たとえば内視鏡的気管閉塞術が胎児期管理の基本とされてきた横隔膜ヘルニアにあっては，最近の呼吸・循環出生管理の著しい進歩により，出生前から分娩にかけての管理ストラテジーが再検討されつつある。また，これまで成功例の報告をみなかった左心低形成症候群の胎児期治療においても，その救命例がみられるようになっている。

出生前診断技術の進歩は，胎児が多岐にわたる異常を有するUnborn patientであり，必然的に外科的治療の対象となることを示してきた。現在，周産期ないし小児医療は，従来の出生後のみの医療から出生前医療をも包括するものとなりつつあるが，かかる視点は今後ますます不可欠なものになる。今回は，胎児医療，特に米国を中心として進められてきた治療面での現況を概説するが，我が国においても，外科的治療を含めた胎児治療の本格的な導入が期待される。

横浜臨床医学会学術集談会演題募集について

毎年，市医師会報７月＆８月号のカラーページで上記の案内をしているのは御存知かと思います。公募が原則ですが，応募者はなく，これまで各区の小児科医会代表者にお願いして順番に演者を決めて来たのが実状です。

各区小児科医会の活性化にもつながると思いますので，これからも市小児科医会から順次各区の小児科代表の先生に演者探しのお願いが行くと思いますので，その節は，どうぞよろしく御協力の程お願い申し上げます。又，合わせて会員の多くの御出席をもお願い致します。

文責　渡辺　昭彦（学術）

第13回横浜市産科小児科研究会の御案内（予告）

この研究会は，妊婦さんが安心してお産をし，スムースに育児に継なげることが出来るよう，産科と小児科が連携して，親しく情報を交換しながら，周産期医療を学ぶ目的で発足しました。平成14年度は，産科が世話役の当番です。平成13年度に発表された「すこやか親子21」（厚労省）からもおわかりのように，この研究会のもつ意義は益々大きいものとなっていると思われます。

つきましては，下記のように開催致しますので多数の御参加を期待致します。出席者には「小児科専門医研修記録５単位」（呼び名が新しくなりました。）が発行されます。

（文責　渡辺　昭彦）

日時：2003年２月12日（水）
場所：横浜市健康福祉総合センター４Ｆホール
演題：「先天異常と遺伝子」（仮）
講師：慶応義塾大学医学部小児科学教室　小　崎　健次郎　先生

医会だより

北部小児科医会

8月26日（月曜日）に，青葉区医師会館において午後7時より30名の会員の出席で開催された。今回の医会には青葉，都筑，緑の3区の福祉保健センター長である，古橋，窪山，豊澤の3氏が出席された。

主な内容は，1）日本小児科学会認定医が専門医に変更となったため，研修会などの参加シールが今回の医会より専門医のシールに変わり，参加した会員に配布された。2）7月に決められた14年度下半期の乳幼児健診への出勤割り当てが確認された。また，15年度からの青葉区の1歳半健診が木曜日午後に変更になる見込みが古橋センター長から報告され，会員の更なる協力要請がなされた。3）青葉区におけるプレネイタルビジット（出産前小児保健指導）がようやく7月17日から開始された。具体的な活動はまだ少ないようであるが，すべての妊婦が参加可能であり，妊婦が直接小児科医にアクセスできるという青葉区方式が今後どのように発展して行くのか興味が持たれた。2月の会合では，具体的な問題点が討論されることが期待された。4）救急隊による小児救急の実態と要望に関する懇談会がもたれ，青葉消防隊から2名の隊員が参加していただき，有意義な情報を頂いた。最近の傾向としては紙面の都合で詳細は省略するが，軽症患者の要請増加（コンビニ化）により重傷者の搬送に支障が出ており，対応に影響が出ているとの事。問題点としては，小児の頭部打撲患者の診察を外科系と内科系で専門を理由に拒否されること，熱性痙攣は入院を要しないために軽症に区分されてしまう現行の制度のあり方などであった。隊員からの具体的な要望としては，突然の発熱などに対する小児科医による親の教育の徹底などであった。会員からは，救急車の有料化の提言がなされた。短時間ではあったが，意見交換に有意義であったと思う。5）市会議員福田氏による小児医療に関する情報より，全額か部分か，又，所得制限などの補助率の問題は残るが，就学前までの医療費補助についての運動の必要性についての解説があった。来年夏までには3年前と同様な要望書に対する署名運動を実施する予定である。9時10分に閉会となった。

（会長　入戸野　博）

緑区小児科医会

緑区小児科医会は，青葉区，都筑区とともに北部小児科医会を構成していますが，8月26日にその総会が予定されています。ご承知のように北部小児科医会は，緑，青葉両区の乳児健診を会員の協力で分担していますが，協力可能日を調整する作業を7月15日に行い，何とか目安がついた状態です。

緑区小児科医会は実質活動のできる会員が6～7名の小さな医会ですので，お互いの意思疎通は比較的うまくとれるようです。昨年新入会員を久々に迎え，今年も1人増える予定です。入会の決まったところで会を開こうと思っていますが，そろそろ緑区単独で乳児健審査をまかなえるかどうか協議したいと思っています。

（会長　一色　保夫）

青葉区小児科医会

青葉区小児科臨時医会を平成14年4月24日に青葉区医師会館ホールで行いました。

議題としては

① 青葉区プレネイタル・ビジット（以下，PVと略）事業に関する報告：

行政，小児科医，産科医が中心となり，「妊婦さんが産科医の先生の紹介状がなくとも，直接，小児科医と連絡を取り受診出来る」という方式で，本年7月17日よりの立ち上げを決めました。今回は，医療機関への経済的な支援がないというハンディにもかかわらず，多くの会員がボランテイァで，参加してもらう事が出来ました。

② 青葉健康福祉センターで行われている1歳6ヶ月の出動の時間帯について：

本年4月より，これまで木曜日午前に行われている1歳6ヶ月健診への機関病院からの医師派遣が出来なくなり，行政より，当医会へ協力の依頼がありました。上半期分は急遽，個人的な協力

で，下半期分は，FAXで出勤の出来る会員を募り，何とかカバー（結局，全部は無理でしたが）する事が出来ました。平成15年度分以後に関しては，会員へアンケート（出動できる曜日について）の結果，木曜午後での出動なら協力可能となり，その旨を行政に伝え，善処してもらう事となりました。

③　青葉健康福祉センターで行われている４ヶ月健診の個別化について：

現在の健康福祉センターでの４ヶ月健診を個別健診の方向へ進めるべく，医会の総意として青葉区医師会へ要望書を提出しました。現在，行われている健康保健センターでの４ヶ月健診は日により１日の健診数が90人以上となる場合もあり，より充実した健診を目指す為に，個別健診が望ましいではないかというのが要望理由です。

④　第38回日本小児放射線学会の案内：

本年５月25日・26日に神奈川県民ホールにて開催され，当区の青葉台クリニックの小田切邦雄先生が今回の会長を務めるとの事です。

⑤　本年度は１名の新入会員があり，承認されました（カク小児科クリニック　加久浩文先生）。

⑥　今年度より始まる「青葉区養育ネットワーク」事業については，今回は３名の会員が参加する事となりました。

（会長　太田　恵蔵）

都筑区小児科医会

前回の医会報告でお約束したとおり，都筑区小児科医会発足以来初の講演会を開催致しました。

平成14年６月25日に，昭和大学横浜市北部病院小児科の野中善治助教授をお招きして，『小児科における病診連携のあり方への提言－中核病院の立場から』と題したお話をうかがいました。

北部病院は開院から１年を経過しましたが，この間地域医療を見守ってこられた野中先生は，すでに医院に通院中の患者が無断で病院を受診するケースが多いことに歯がゆい思いをしていらしたそうです。そこで，われわれ開業小児科医が日常よく診る症状や病気に対して，保護者に不安感を与えない医療，満足感や信頼感を与えられる医療を行うための具体的なアドバイスをいただきました。

転院する理由は① 咳がひどい，② 熱が高い，③ 下痢が長びいている，④ 解熱剤をもらえない，⑤ 漫然と同じ薬が処方されているなどが多く，これらを中心に，喘息・アトピーに至るまで，幅広い病状に対する対処法のコツを伝授していただきました。また，必要ならいつでも病院に紹介するという意思表示をしておくことも大切であると強調されていました。

野中先生からは紹介患者の症例検討会を定期的に持ったらどうかの提言もいただきましたので，今後の検討課題とさせていただきます。

（文責　殿内　　力）

南部小児科医会

平成14年度上半期の医会活動の概要をご報告します。

３月15日に定例幹事会を開催しました。正副会長及び幹事が参会し，年間の行事計画の再検討，会費の改定等について討議しました。

６月12日に済生会横浜市南部病院にて，定例の総会と講演会を開催しました。総会では，３月15日の幹事会での決定事項が承認されました。

講演会は藤沢薬品工業株式会社の共催で行われ，国立相模原病院病態総合研究部長，海老澤元宏先生が「食物アレルギーの現状と対策」と題して話されました。海老澤先生は昨年の新年会でも，喘息についてお話いただきましたが，会員の好評を得ての再登場です。今回は，近年患者の増加が指摘され，一線の小児科医にとって避けて通れないトピックでありながら，まだまだわからないことが多く，対応に苦慮する食物アレルギーの問題について，ご自身の実際の診療体験を踏まえて，具体的で明快なお話をされ，会員諸氏の実地診療に大変役立ったと思います。

下半期の予定ですが，秋に県衛生看護専門学校付属病院で定例の研修会を開催する予定（日程未定）です。年明けには，これも恒例となった新年会と講演会（日程未定）を開催いたします。

（文責　森　　哲夫）

中区小児科医会

第175回　2002. 2 . 20

講演：運動誘発性食餌性アレルギー疾患

市大センター病院　相原　雄幸助教授

まだ報告例の少ない疾患の貴重な自験例を豊富な資料を用いて，諸検査の意義説明を交えながら，分かりやすく解説していただきました。過去に本会の会員だったこともある同氏の親しみある話し方は，会員に非常に好感をもたれて，和やかな気分は質疑応答を通じ，懇親会場でも続きました。

会員近況：現会長の寺道由晃先生が4月より他職に着くため，ご指名により後任に山崎康子新会長が選出され，会場一致にて承認されました。また，中区小児科医会の活動内容開会回数についての見直しがなされ，出席者全員が病診双方の立場から，今後の理想とされる運営方法について，意見を述べました。招待講演の内容について，医学以外の分野の希望が多数出て，今後の講師招聘時の参考となりました。

第176回　2002. 4 . 17

講演：脳の性差について

東大農学部生命科学研究科教授　医学博士西原真杉先生より，実験データに基づき，雄性雌性の胎内のホルモン変化がその後の性差に及ぼす影響を説明していただきました。男子や女子の行動パターンの違いを司る脳内部位の解説や，最近話題性が高まっている性不一致障害との関連性も示唆に富む講義をしていただきました。日頃親しみ慣れた臨床と異なる視野での専門的観察が，出席者の興味を引き，盛んな質疑応答で演者が落ち着いて食事することも困難でした。

会員近況：新入会員や退会会員の発表，向山先生よりメキシコより来訪中の女性小児科医を紹介され，スペイン語堪能な大本先生が心暖かくもてなし，中区独特な雰囲気の会となりました。新会長より新体制の抱負が発表され，病院勤務医側の幹事交代がありました。

第177回　2002. 6 . 19

講演：小児喘息の薬物療法

同愛記念病院　向山徳子小児科部長

小児アレルギー学会会長も兼任したことのある同氏から，小児喘息の臨床面の歴史的変遷を始め，治療法の進歩から外来患者さんの受診動向の変化を自院の症例等通して示され，進行中の小児喘息治療のガイドラインも途中経過を教えていただきました。非常に臨床的に，具体的に温和な語りで講義されて，日常診療ですぐにも役立てられる内容ばかりで，大好評で，大変好評で時間の経過が短く感じられました。

会員近況：恒例の向山先生より伝達講習があり，詳細を野崎中区医師会長が補ういつもの形でスタートしましたが，世相を反映して，今回は医療保険改正後の話題や，薬品会社にレセプト提出依頼不可など，小児科領域よりも，開業医全般に関する事に関心が集中しました。

次回第178回は，光栄にも，小児科医でもある中区区長の大浜悦子先生にも出席の御返事をいただいてますので，楽しみです。

（文責　蔡　誠偉）

東部小児科医会

平成14年度前期の活動報告を致します。

★臨床研修会

平成14年6月26日（水）

横浜労災病院3階AV会議室

横浜労災病院小児科の中島千賀子先生に小児呼吸器疾患，特に喘鳴を起こす病態について，診断を中心にお話頂きました。レントゲン，CTは勿論の事，気管支ファイバーを駆使して診断に到達する技を紹介して頂きました。一般開業医にはあまり馴染みはありませんでしたが，日常診療で結構見逃している病態（例えば気管支狭窄など）が今ではこんなにはっきり目で見て解るようになったのかと，出席者全員唖然としてしまいました。なかなか，開業レベルではできない手技ではありますが，私達の今後の診断技術を磨いていく上でとても勉強になりました。

★港北区民こども健康フォーラム

平成14年7月13日（土）港北区公会堂

今回始めての試みとして，学校や保育園，幼稚園の養護教諭及び一般区民を対象に，区医師会長の了承を得て，こどもの健康づくりフォーラムを横浜労災病院，東部小児科医会，ファルマシア㈱

共催で開催しました。演題は，こどもの成長と発達（横浜労災小児科，深見真紀先生），心臓病を持つこどもの管理（山口県健康づくりセンター長，砂川博史先生）の２題でした。猛暑にもかかわらず，会場いっぱいの参加者が集まり大成功のうちに終わりました。参加者からは，なかなか聞けない話が聞けて，とても勉強になったと多数の感謝の声を頂きました。今後も，この様な企画を作り，当会としてもささやかながら地域の啓発活動に少しずつ役立っていこうかと考えています。

（会長　中野　康伸）

西部小児科医会

前号掲載以降の例会は以下のように開催されました。

★第210回

日時　平成14年７月25日（木）

演題　「小児の形成外科疾患の治療方針について」

講師　横浜市民病院形成外科医長
　　柴田　裕達　先生

納涼会を兼ねて，クラブ・エクセレントイーストで楽しく勉強会を行ないました。

小児領域においても，血管腫，母斑，兎唇口蓋裂，多指合指症，耳介奇形，副耳，術創の肥厚性瘢痕，褥瘡等で形成外科にお願いする機会が多くなっており，症例を呈示しながら手術適応や時期，術式について説明していただきました。

今回は他の委員会と重なり出席できなかった先生も多く今後の開催日程や，他地区の小児科医会との合同開催等について検討したいと考えております。

（文責　石原　　淳）

南西部小児科医会

当支部内では，下記の様に講演会や症例検討会が開催されました。

栄　区：小児疾患地域談話会：横浜栄共済病院にて

第21回　平成14年７月31日

・梶ケ谷保彦先生

1　2001年度の小児科入院患者統計で紹介例の集計

2　児童虐待の早期発見と防止の問題点
　母親のネグレクトが危惧された喘息兄弟例

・後藤　晶子先生

1　持続する頸部リンパ節腫脹から猫ひっかき病と診断された１例

・奥　　典宏先生

1　急性胆嚢炎を合併した川崎病の１例

・梅澤　礼美先生

1　喘息性気管支炎の１例…父親による虐待防止に苦慮した事例

・黒澤るみ子先生

1　特発性血小板減少性紫斑病の１例

戸塚区：小児疾患研究会：横浜西部総合保健センターにて

平成14年７月10日

・伊部　正明先生（国立横浜病院小児科）

1　2001年度国立横浜病院小児科入院患者について

○乳児麻疹の経験

・斉藤　千穂先生

1　アレルギー児の予防接種…卵アレルギー患者と麻疹ワクチン接種を中心に

・志賀　綾子先生

1　小児気管支喘息児における慢性副鼻腔炎とその経過

・福山　綾子先生

1　アーモンド誤嚥による誤嚥性肺炎の１例

（文責　嶽間沢昌和）

金沢区小児科医会

長らく金沢区小児科医会の世話役を務めてこられた黒住浩子先生が退職された後を引き継いで，平成14年４月１日付で横浜南共済病院小児科部長に就任しました池部です。宜しくお願いいたします。転任したばかりで院内の様子も職場のスタッフの顔も不案内な翌４月２日に，横浜南共済病院会議室にて黒住会長による最後の司会で症例検討会を行いました。

・鏑木陽一先生

「哺乳不良で発症した生後１ヶ月の重症心筋炎の１例」

・菅井和子先生

「マイコプラズマ肺炎による重症な肝障害が疑われた兄弟例」

・藤田秀次郎先生

「無熱性痙攣を契機に判明したNesidioblastosisの１例」

・石田　華先生

「遷延する黄疸で発見されたⅡ型シトルリン血症の乳児例」

・成相昭吉先生

「小児下気道感染症の起因微生物と抗菌薬の選択」

ご出席された先生方と引き続き協議をした結果，金沢区小児科医会会長を大久保慎一先生，副会長を私（池部敏市）が担当することとなりました。

（文責　池部　敏市）

庶　務　報　告

1　総会・研修会

H14．5．10（金）

於　横浜市健康福祉総合センター　４階ホール

出席者71名

議事 (1) 平成13年度事業報告について

(2) 平成13年度決算報告について

(3) 平成14年度事業計画案について

(4) 平成14年度予算案について

(5) 医会会則の改訂について

(6) その他

講演会「日常診療に必要な小児眼科の知識」

－発達期の眼疾患－

講　師　森實　秀子先生

（もりざね眼科　元国立小児病院眼科部長）

2　常任幹事会

H14．4．11（木）於　桃源　出席者13名

3　第12回横浜市産婦人科・小児科研究会

H14．6．4（火）

於　横浜市健康福祉総合センター　４階ホール

出席者51名（小児科27名）

演題「胎児の外科的治療」

講師　千葉　敏雄先生

（国立成育医療センター特殊診療部部長）

4　広報活動

(1) H14．4．1　小児科医会ニュース第24号発行

(2) 横浜市医師会ホームページへの市民向け情報の提供

5　その他

(1) 社保新点数説明会

H14．4．22（月）

於　横浜市医師会会議室

(2) サマースクール事業への医師派遣

H14．6．13（木）

サマースクール事前健診

H14．7．24（水）～27（土）

サマースクール本事業

（庶務　大西　三郎）

会 計 報 告（中間）

小児科医会ニュース第25号掲載のための，中間報告を申し上げます。

平成14年９月12日現在

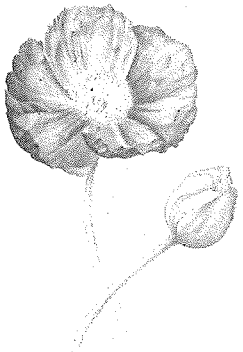
現在高		3,536,995円
（内訳）	現金	64,551円
	郵便貯金	2,579,925円
	貯金センター	8,860円
	医師信用組合	883,659円

14年度会費は９／12までに3,000円×90入金（医師信用）です。

●交通費未払分　78,000円

以上

（会計　小林　幹子）



編集後記

９月13日に私の医院の間近かで起きた小田小学校の悲惨な事故：翌日に予定されていた運動会の練習を終え集団で歩道を下校している２年生５人が車に轢かれました。私が校医をしている学校でしかも普段，喘息などで当院に通院している子が４人含まれていました。１人は軽症，３人が重症で入院，そして１人は救命救急に最初に運ばれましたが不幸にも亡くなりました。事故であったうえにしかも幼少のこどもの葬儀はとても重苦しいものがありました。病気で通院したり，健診や予防注射で応対してきたこどものあまりにもあっけない他界はとても虚しく悲しいものでした。遺族の悲痛な嘆きのなかで気丈にも参列者にまっすぐ挨拶をする姉の姿は涙でよく見えませんでした。予防注射を嫌がって学校から脱走を計ったことのある姉がもう中学生でした・・。今後は事故に遭遇したこどもたちのPTSDにも留意しなくてはなりません。

三澤孔明先生の山手教会でのお葬式は生前のお人柄か悲しみの小雨の中でも愛情が充ちあふれたよいお式でした。いまだ現役でのご逝去でしたが皆さまが述べられましたように多大な功績のみならず，あの大変な喘息サマースクールに毎年参加されたように診療の第一線にいらっしゃったことは我々のお手本でもあります。学校医部会でのご指導だけではなく大学の同窓会でも可愛いがっていただきましたご恩は忘れません。先生のご冥福をお祈りいたします。

（藤原　芳人）

2002年10月１日発行
横浜市小児科医会ニュースNo.25
題字　五十嵐鐵馬
発行人　横浜市小児科医会
代表　矢崎　茂義
編　集：横浜市小児科医会広報部
事務局：〒231－0062
横浜市中区桜木町１－１
横浜市医師会：事業二課
Tel　201―7363